

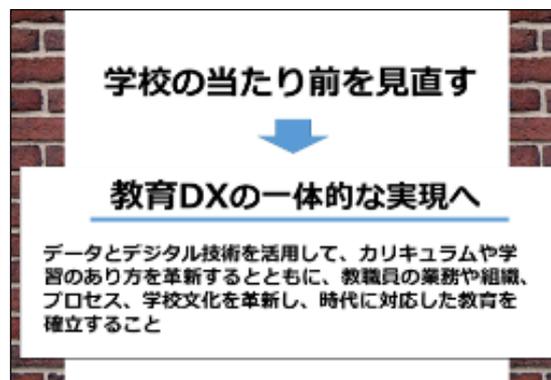
令和4年度 5月定例校長会 教育長講話 要約

1. 教育DXの一体的な実現へ

4月の校長会から約一か月が経過し、各学校では、コロナ対応に加え、熱中症対策などに留意しながら、それぞれの学校ビジョンに沿って学校づくりを進めていただいているところだと思います。

4月の校長会では「学校の当たり前を見直す」ことについてお伝えしましたが、紙媒体による情報伝達のデジタル化に留まらず、積極的にICT機器を活用した教育DXを推進するとともに、学校行事や授業のあり方なども大胆に見直して、新しい教育を進めてください。

教育委員会としても、そうした学校の取組を支援できるよう、指導主事が学校を訪問し、校長先生や教頭先生との面談を始めています。訪問では、子どもたちの様子や学校の取組と合わせ、それぞれの学校での課題や悩みなども聞かせていただいています。学校と教育委員会の繋がりを深め、「顔の見える関係づくり」を進めていくなかで学校を支え、校長先生から頂いた話は、今後の奈良市の教育の推進にフィードバックしていきたいと考えています。



2. 東日本大震災における奈良市の支援と取組

さて、今年で阪神淡路大震災から27年が過ぎ、東日本大震災からも11年が経ちました。皆さんは、当時と同じ危機感、思いをもって、今、学校経営をされていますか。

阪神淡路大震災の際は奈良市でも震度4の大きな揺れがありました。

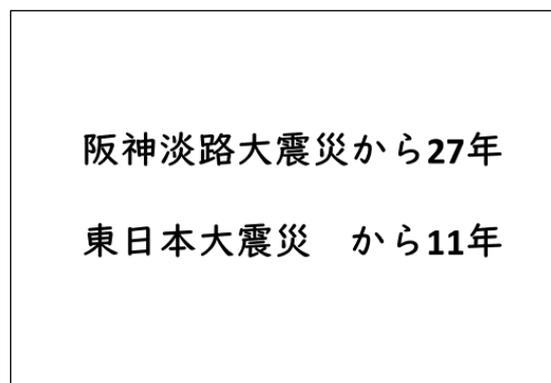
当時、私は中学校に勤めていましたが、学校でも子どもの安否確認や校舎の被害状況調べなど、緊張した記憶があります。

11年前の東日本大震災の記憶はさらに鮮明です。

2時46分、震災と同時に第一報が入り、その後、続報が入るたびに、その被害の大きさに愕然としたものでした。

奈良市では、翌月の4月下旬から、市職員を姉妹都市である多賀城市に派遣し、震災支援を行っています。

皆さんのなかにも、当時、多賀城市で支援活動された先生もおられるかと思います。



翌 2012 年には、文部科学省の「学校施設の防災力強化プロジェクト」事業を受け、地域教育協議会と連携しながら、中学校の生徒会による防災力強化の取組も試みています。

当時は、生徒が実際に被災地である仙台まで行き、現地の中学生と交流するなど、本当に「我がこと」として取り組んでいました。そうした取組の中で、「自分たち中学生は、守られる側ではなく、地域の人たちを守る側になるんだ。」という意識も高まり、将来の防災リーダーとしての自覚も芽生えていました。



3. 震災を風化させず教訓に

こうした思いや取組が風化することなく、今なお継続し、地域とも密接に連携し、組織的・発展的な取組となっていますか。それぞれの各学校では、定期的に火災や地震・不審者に対応するための避難訓練を実施していると思います。

そのとき、「災害は、いつ起こるか分からない。起こってからあわてても遅い。想定外の災害に対し、日ごろから防災・減災の意識を持ち、準備を整え、いざというときに自分で考え行動できる力をつけておくことが大切だ。」などという話を、子どもたちの前ですると思います。しかし、そのことが、学校としてできていますか。

「防災マニュアル」や「危機管理マニュアル」は、どの学校にもあると思いますが、つくりっぱなしになっていませんか。すべての教職員で共通理解が図られていますか。消防署や行政など、専門家の意見を聞き、計画の段階から地域の自主防災防犯組織とも連携しながら、定期的な見直しをしていますか。そして、そうしたことが、保護者や地域にも、浸透していますか。

新しい年度が始まり、ひと段落が付いたこの時期、改めて地域とともにつくる学校の防災体制の確認をお願いします。

風化させずに、教訓とする

「防災マニュアル」や「危機管理マニュアル」の
定期的な見直しを

すべての教職員・保護者・地域で共通理解を

地域とともにある学校づくり

※ 終了後、本市の國友危機管理監による、「被災地の命に向き合った 144 日」と題して講話が行われた。